

<ねむの木学園創立45周年記念> 宮城まり子監督作品DVD 4タイトル

★ドキュメンタリー映画4部作を初DVD化 各¥3,990(税込) 各タイトル ボーナスCD付き



<宮城まり子監督作品①>

ねむの木の詩

うた +ボーナスCD付(映画主題歌+アルバム『NEMUNOKI』)

VIZF-5012

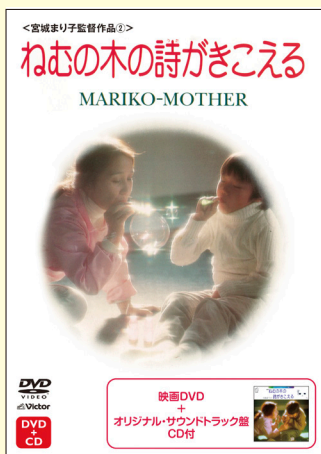
●1974年作品 ●監督・製作・脚本・音楽：宮城まり子 ヴァルナ国際赤十字映画祭銀賞、文化庁優秀映画奨励賞、他

女優の宮城まり子が主宰している肢体不自由児の養護施設「ねむの木学園」には、47人(当時)の園児が生活を共にして、勉強し、機能回復の訓練を受けています。

そのほとんどの子供たちは、脳性マヒで親もいないという、幼い体にはあまりにも重たすぎる不幸を背負っています。けれども子供たちは底ぬけに明るいき心を持っている。そう、もっと強く、そして幸せに生きてほしい。その願いをこめて、宮城まり子が自ら 製作・監督し、「ねむの木の詩」はつくられました。

「記録という固さを感じない。脚色という劇的も感じない。ただあるのは見つめ抱きしめる生きた本物の暖かさ。涙があふれて、しかも時に笑ってしまう。「砂丘登り」は絵のように美しく詩のように美しく、しかも胸にいきこんでくる痛ましさだった。」

淀川長治(映画チラシより)



<宮城まり子監督作品②>

ねむの木の詩がきこえる

うた +ボーナスCD付(オリジナル・サウンドトラック盤)

VIZF-5013

●1977年作品 ●監督・製作・脚本・音楽：宮城まり子 ヴァルナ国際赤十字映画祭スペシャルグランプリ、第19回毎日芸術賞、文化庁優秀映画奨励賞、他

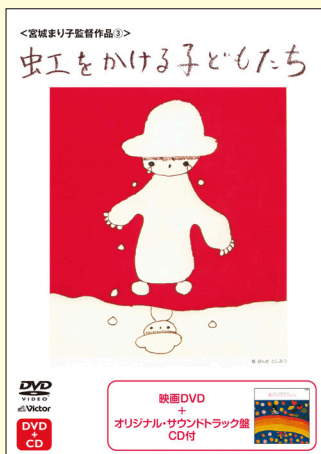
この底知れぬ愛に惜しめない拍手! 世界の賞をさらった感動の名作!

「ねむの木の詩がきこえる」は、自閉症・脳性麻痺・言語なしの子どもの姿を通して、教育とは、友情とは、愛とはなにかを問いかげながら、美しい画面で学園の日常生活を綴った映像詩である。

1977年7月に岩波ホールで公開されるや5ヶ月にわたる大ヒットとなり、1978年夏には東京都内で9週間のアンコール・ロードショーが行われるという異例のロングランとなった。

「モノ言えぬ生徒に口移して言葉を何回となく発声させるシーンがあった。これもシーンと言うよりも実景だった。口からツバキがとび口からよだれがたれた。あの実景を見たとき涙があふれた。みもよもなく打ち込んだ体当たりの教え方に涙があふれた。」

淀川長治(映画パンフレットより抜粋)



<宮城まり子監督作品③>

虹をかける子どもたち

+ボーナスCD付(オリジナル・サウンドトラック盤)

VIZF-5014

●1980年作品 ●監督・製作・脚本：宮城まり子 ●音楽：佐藤允彦
1981年6月フランスよりシダラック大賞受賞(映画として、最も絵画的、文学的と評価された国際賞)、他

ねむの木の子どものたちの絵画300点を中心に展開されるシネエッセイ。子どもたちは見たものを絵に描く。映画は、日常生活、音楽、結婚、勇気などのテーマを、日本の四季をおりこみながら絵とともに映し出してゆく...

ここにあるものは、「まり子さんの自己を捨てた愛が生んだ奇跡」光の結晶というしか今は何も言えません。それしか言えず何の論理も言葉もこの絵の前に成り立つことはないのです。

そして、この作品群をまり子さんが映画化されたのを見た時、改めて、その絵の美しさ、生きることの美しさに感動したのです。それはみごとに、シネエッセイとして新しい映像の世界をひらかれたことに心からの拍手をおくるのです。

谷内六郎(画家)(オリジナル・サウンドトラック盤ライナーノーツより抜粋)



<宮城まり子監督作品④>

ハローキッズ! がんばれ子どもたち

+ボーナスCD付(オリジナル・サウンドトラック盤)

VIZF-5015

●1986年作品 ●監督・製作・脚本・音楽：宮城まり子 ヴァルナ国際赤十字映画祭特別功績賞、他

1984年、ねむの木の子どものたちは、世界の障害を持つ人々の芸術祭に招かれニューヨークを訪れ、麻薬事件や殺人事件が日常茶飯事として起こるハーレムに住む子どもたちと出会う。

その後、ハーレムの子どもたちは2週間日本に滞在し、ねむの木の子どものたちと一緒に生活する。肌の色の違う子どもたちとのふれあいや心のやさしさ、日本の自然の美しさ、そしてダンスの特訓等を通じて“がんばれ子どもたち”と呼びかける。これは宮城まり子監督が人間への讃歌を謡いあげた他に類をみないミュージカル・ファンタジーである。

「ラスト・シーンに近いところで宮城さんが「ねむの木学園」の上級生らしき男子にミュージカルのダンス・リズムをくりかえしくりかえし教えるところは彼女が鬼に見えた。足の骨も折れよとばかりのリズムリズムリズムの鞭だった。これまでしてまで教えこむ必要があるのであろうかとさえ思わせる。見ていて残酷にさえ見えたこの実景。しかしここにこそ実はこの映画の製作者・宮城まり子の愛の宗教を見た。」

淀川長治(映画パンフレットより抜粋)